



特 5  
1958 ~ 1958



夫俗姓を肉藤として世々尾張のふた山  
北城之子を以て仕ゆ文を有る事なり  
漢乃才あり若きより佛系に歸して玉書  
和尚の禪意をつへ奉るを辭して蘿壑を  
偈の多系負屋一飽半化依結禱は自由  
也其最憶延保弓追尋法雨入林丘  
麓白淨風子まゆるをぞ北かとり山とて  
あつとまりて湖南北葉津龍の岡平第  
飛をむまひ佛幻庵と号し芭蕉翁を南  
嶺と号ちうくすてそ北臨ありまの書のむとふ



翁此減後山子死りて侍君乃報せしむ  
一石一字の法華經と書寫して讀み樂く  
元禄十七年此書二月廿四日床子生  
化を際ち就て墓乃東林の中子あり正秀  
墓子少く侍

此書は...  
元禄十七年...  
二月廿四日...  
床子生...  
化を際ち...  
就て墓乃...  
東林の中...  
子あり正...  
秀墓子少...  
く侍

丈多度白集

春

うらひもや茶花お梅乃新舟衣  
巾篋戸のあふちこつや梅花夜  
床編ま梅さくくくくく梅乃  
待こも梅子何るも梅子木

春納

梅のや湯豆の跡此岸の切

片屋栢の梅ひらきうり 煙出し

逢也く新巻を有ま

水仙子他多き梅の意

尾張の玉よきを揮りて

く免れ花ちり初らり 疑遊風

芭蕉翁の世苦を思ふ

梅の香にすまぬ道此ちやうの乳

引よせてちやうの心さ 梅う南

我よりと 雛の如く根芥菜

きよけをやくし用と帯を思ふ

まひらうちんそ 金器を志や

まよけまよちのこさぬやねりうと

皆名中もさるるのうらり 田録

里北男の田塚のうを水産子

泥少ちち居れハ腹をむき

然乃いらうともるく入こりて

入替る 雛も死ぬる田うらり

取つぬいんてうらぬ 蛙可難

梅もきき遊らて

於んさうちとして中嘘う菊

中菴

火をくして形を啼き雨の  
の猫やういれ行ふと松竹  
帰る空ちきてや夜おのやも  
高冊の燈を柱よりく煙を  
新くく子回しひとくく松竹の

支考例列

松風の音や重葎の音お小  
燕の雁子空てや啼き  
芦文子別くくく

露付松いれぬやうきや  
大尔戸蝶の出てく小機  
陽光子遠く松竹へまきり

芭蕉翁乃續ふ素て我病身

をとおふ

か市ろふや暮よりおよ候と  
高雨や何ういそん  
ころす免やぬけ出さず  
身を風やまらぬあし  
さし物とせまらぬ

てらゆへに子枕乃のこころと嫌ふのこ  
唯然子ふ自由ちり雀おぼれく  
是とて幾れ無せしきし子生くま  
つゆりよのこを寝さおる人ちりよ  
此まを故つこを故上の存着ま  
歌んる 形ま南まきま山村野  
亭枕枕にいらる木かゆしと  
従て跡係ままも一入まこま  
後己送る政子のそくま  
未枕の作中伊吹ま跡係を

雨居

新夕にせしは出燈や亭枕し  
白妙よ身形 烏や花の奥  
美はまよし枝ましんちまま  
角入かこをうらや急の左  
糸に刺伶の鋤を備くと興て  
碎死ぬ先う花北くろくろり  
うくくとまてま花又の留居小  
亭枕輪の器て入床や山桜  
花是り田録の事とや水か衣

死とも留まとも老れ古庵の花  
雲持の庵よりふかふか又うれ  
花ちるや歌ありとも岩に穴  
水壺よりつるや花乃人出入  
片風を思ひより布より花むし  
ちかうさき志賀よりおけ渡の志  
木塚や枯木をささる花に牛  
笠松子舞むより花の友  
小豆乃火燵めけてや急忠下

海東の花

あまくもや花又花中乃りなり

病中

山より花を人よりや花もや  
夕と一や急の波こそあつて

餞別

又送り花先よるつくり  
咲きもや柴の香もや蹴踏山  
さしぬく意へつくり花日足のお  
あつくりく岩より下や藤の花

畫續

何れも鳥の影を移すむく焼子の  
三月や多れ鳥色は葉一本  
三月  
明ぬ間を星も何れも春の持

夏

村多啼やぬ水乃さく溜り  
飛也さやうう 静れをとりまき  
子規 籠より上のさくさく

川越乃渡中うまや 郭ろ  
不心く まき誰よやさく川むら  
啼ぬ 肩よさうつと以れ村多  
葉経る 焚や神風の子規  
杜鵑さくや板も 梅さぬら  
走るへく山路もさきよ 杜宇  
山道や壺もさくさく 村鳥  
此の啼もて  
春 追の在るや 葉乃 杜鵑  
本曾川 此をとりまて



ちのれ木や篝火の上は不女帰

月夜の松原に礎出で

夜丸のけいこは中にたふさき

遊女命寺

筆は能を啼出せ 静に

待て待や梅田は把妻 蜀を鬼

壺の梅乃麦や種を出て夕夕影

朽ちりよやう上りて梅田植の丸

谷風や青田を廻る庵の客

杉風と中は青田の戦きよ

夕夕や茂るよる川は臨

多来る高栞舎まで

芽本より二葉は茂る栞の空

夕夕鉤瓶蛇のり葉や杜は

喜一ややる鎌やまむる壺の草子

魚鐘やあ休そよ山つよ

夕夕つれで陽る喜もやも栞は

草花を出たわが家は羽音の

夕夕里とて堂の中や谷の水

螢火や壺はあつせし庭のへり

豊後龍門寺孤院

曇火や村中より取る龍形水

曲水孤子を悼

あはれを 抱て不<sub>レ</sub>悔乃さうりか

やうしと出<sub>レ</sub>啼<sub>レ</sub>村う<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>る

仰木の里書懐

れ孤の言乃<sub>レ</sub>后や水鏡の碌<sub>レ</sub>孤園

血を分<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>孤と<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>あ

新日こ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>ひ

哀痛傍人

り志<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>情<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>る

皇九判襲せし時重辞

故情も出<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>障<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>友<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>月

傍<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>蚕<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>耳<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>元

電<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>火<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>出

梅をさすり帰ると亭

梅<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>帰<sub>レ</sub>ると<sub>レ</sub>亭

夕<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>孤<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>梅<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>系

美濃の園まで

町<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を

白面よとて下は十井北鏡  
夕立子飛のく月也松のう  
添くまに存よとや岩のうぬ  
小屏風子山里すし 版北上  
あゝ磴や水て字をぬく夕ま  
つゝ立子枕よちる袖や涼ふ  
あふ乃 根ぬけや漢の登ま  
まゝくまに心もくましく  
まゝくまに扇を魚こ形ま

丈山乃像

まゝくまに扇を魚こ形ま

大山よて市中苦熱

涼しくまを尺せてやうく  
ぬ希果一袖涼北あま  
西梅序乃袖涼

西梅序乃袖涼

赤水よのこ梅ま  
淡筆にま合也あり  
浦舟出頭色し子  
蓮のう

惟此軒勝は送り下

あまてふ歩り神つ  
雨毛の雨糸とえ  
るる着少

之妻法阿方をうりて  
世北中を抜あしと伝國庭の古

旅行

惟子にあたりわりま川日北出に  
梅存をも立出るとして  
西乞よ先立りふや玉姫は

秋

於夕途秋のともや京の廣

取明すて由受中やニツが  
精雲北もういし人とあつる  
原空乃傳ありまや山の上  
意柳や葎木をもう月北新  
精雲も出てうりの世の旅存小  
蒼里に降りて  
精雲にもうりあせつ十年ゆり  
送り火北山の上るや京北新  
精雲北やれてるや山のうへ  
夜舟より上りて酒を喜ぶ時

いぢつや夜明て後も舟うろ  
悔ふ人北やまれやまろくま  
り憐れ心や涙の記りくす  
言せてや戸さうれも寝解  
踊子乃らへりまぬ夜や巻  
そらんと元も啼きまじくは  
まろくも啼や此立北寝の下  
物うけて存もや涙のまろくも  
存くろ北方ろろむや嘘啼  
つれのお家へ掃りそ地ろくは

病床

出北音の中よ嘆出も寝まど  
啼木乃入おろろりそそ  
そそはあそふ通北奥に  
中よけともやうう夜をそは  
山とるややうつる鳥北こ  
ゆけうにちうひて死る秋乃  
旅中  
晴塔北まそも鏡とる笠の中  
啼くろく目さしもくし一屋北形

山崎崎十町とくちくちく底の序  
河津の道を思ひくつたる花 神うま  
果給の身や直出さく庵乃舟  
名月やあふたり あふれ光  
辻を子菊とてこむ 月夜うれ  
戸もゆて目かきくや 芝水止  
うゝ 掃き漏よあてり月のみ  
聖山よりつて登る身乃あ  
京茶感とふ此丹ふ僧仲可

渡川の遠くまで

舟引此道くさけきう月忍れ  
麦白してやうとれるりふ此月  
成る白も林と無といひくさる丸果の時  
とてえて言出さる白れすし  
友より此の舟よ有 舟女新雪止

冬見七青山菴

焼栗も岩も花ゆく夜うらな  
病人と鏡よ木よ存る花雪うら  
海乃後然と宅よりあつ一陽子  
荒とも出立此 芽をこころり



鶴乃に道く遊るや笠の襪  
 鶴冠乃鳥さうつまやぬり枕  
 了り柿や障子よるふ夕日影  
 木つら子多穴熊出候親柿小  
 唐柿金まゝたゞころろ  
 浴巾かゝれぬこはよ的尾松  
 谷こし子鳴子の籠や窓紙中  
 居風呂の下や藁山子乃方の跡  
 借のけし庵紙鳴や糸糸菜

鳴るよて

竹伐乃和よ見えも菊のぬ  
 芋の種やし新換上糸巻さうた  
 あり紙種巾巻をゆゑて折もせん  
 甲斐のゆゑと横紙お葉ふ角  
 稲穂子出候あるしや秋の雨  
 松の葉紙地ふ立ちぬ秋紙雨  
 柿よりちきやをさへし候や  
 伊賀へくま村れと記端より  
 いふれとま味紙おも秋紙雪  
 何猿も秋まゝとさう山紙こへ



旅 庵 と 又 う え よ う ぬ り 秋 の 地  
 喜 宮 や ち さ し も ち う ま 梅 枝 水  
 帰 り 来 る 魚 の ま と の や 居 れ 葉  
 重 民 の 新 喜 喜 よ 出 る 禁 う れ  
 毎 朝 此 ち さ と り え せ て 此 山  
 須 下 乃 浦  
 詠 亦 小 秋 の あ て と や 寺 と 船  
 り 秋 や 梢 よ う 海 龜 層  
 行 秋 乃 山 由 り 強 ち 庵 乃 南

留 庵 し 松 立 う れ 地 乃 初 し う れ  
 一 方 々 森 此 ち う 乃 村 雨 ち 音  
 馬 ち 乃 り 沖 の 村 雨 の 行 交  
 葉 人 う し 丸 け ぬ く 鹿 田 此 橋  
 鳥 の 羽 も さ と う ち 乃 し う れ 口  
 為 根 昔 の 海 を ぬ り む く 村 雨 う れ  
 編 も く 沈 か ぶ く り 影 や 村 し う れ  
 風 ち や 村 雨 を う る 此 ち 乃 ち へ



東風きり花を吹きて

むらさきとみや村雨花うら若

越中翁像と白

八月や村雨うら若花を光

海山花うら若つきあふ庵の上

所思

もれうら若花うら若うら若

芭蕉翁病中新緑の白

峰こそ野のまらふやむらさきや

くらげの海の子侍りて

うつくや花葉の下花うら若

徳之師花うら若

曉の暮もゆるくやあやうら若

芭蕉翁追悼

ゆりさきや花うら若や墳の前

色蕉翁の七のくもうら若

若さ若さ花うら若偶居て心地

花うら若うら若うら若

若さや茶湯の後乃とまり鍋

おくの暮所も同じ蕉翁のうら若

走らぬこゝに此衣を脱ぎぬかに  
湖上乃木曾寺より此衣を脱ぎ  
安んぬる人々のぬいづまの  
袖の洞もつしか此時雨をま  
むふ齋寺乃夕アより終て  
梵道吟席のつと免ぬまを  
終るゆ袖まひより終る宿  
身ぢんハぬこゝ此衣を脱ぎ  
くせりあると近き谷川乃小石  
うまあつたる蓮花の葉を  
得

こゝに此衣を脱ぎぬかに  
謝せんを頼んで此衣を脱ぎ  
まゝのこゝに此衣を脱ぎぬかに  
筆を投ぐちも此衣を脱ぎ  
巻前の松也と云ふ所の  
石 此衣を脱ぎぬかに  
芭蕉翁七回忌追福此衣を脱ぎ  
経の鳥の前書あり  
待うけり此衣を脱ぎぬかに  
水底の岩より此衣を脱ぎぬかに

風乃あざり 雪のやこぬ柳

素言此玄梅 蕉翁乃

こころしの身を 佛さかこころるる

白も夢えてそ 此翁の像をむて

磧 夢らるる

木々しく 此身を 控うろく 雪の半

天のへ 俗名の あられや 雲の

山中泊

雪ぬる 宿此 志中り 平筆此

もつ 雲の 泥みよ 水つ 雪の色

思ふも 此雪 見や 比叡の 前りら

雪 雪乃 序 隅さひし 半此 雪を

根 此雪 ころあ ちり雪の ころれ

狗 是き 俗や 水や 散此 雪を ねに

ゆり へて 山うう 尺さし 雪の 意

概 有く 雪此 昼 間や 雪 暑り

夢も 山も 雪よと ころれ 何れも 雪

さう ちくや ぬりつ 雪峰の 雪此 雪

おれ あらて 中 行 色や 雪の 友

都の人かききしる  
山を孤あやうとや述へる京の雪  
唯唯の地明な花子て  
柴北戸や花の房も我も雪北を  
ち来々菴と訪らるる水邊に  
別るくとと  
令 是るう 舟の上を 啼鳥うれ  
村雪乃 岩も出るや 雪吹の根  
まやに 雪の黒も や雲北向

淋しさの 花ゆけて 降みきれう南  
背戸に 北へ 上ふ鳥うれ  
さよるる 庚申待乃 舟形  
水底を えて 春の 影の小鶴小  
花うさ さをそや 立々う 鶴のもれ  
絮後北 存免く 中鶴北  
指の火や 曉さる 五六尺  
子庵の 火燵の下や 古狸  
下系を 包うて 火燵 存脚うか  
かこくと 新日さし 火燵う 念

守り居る中庭を菴の中亭の  
吹流ありや今も山やおもふ  
り曉の蔭をかりしをとよみと  
山やおもふ歩性の中庭を庭  
峯の夢や懐の人々 焚火の行  
残る者てよれん火燧のそとり炭

負交

かしこも残子の切を懐りりり  
一夜さよ猫し鳥子もやけ火うれ  
居るはさへうらぬ物ありえれ

立列る指北跡もさこそと思ひて  
踏やぬる歩性の中庭を土産  
鶏北に足つゝや今こもり  
三つゝさきと珠も思こそと  
舟もよ新氷もや鈍もさ  
一月もやれぬ米らせと地  
いゝ内乃牛にひくや 鈍教  
七峰の七渡鳥撰集の句  
句撰やとと几障夜のまゝと酒  
水風呂を笈しうけり谷の案

鷹北目の枯地、居付あつて、  
神杉乃さえこも新や新道の夏  
黒海、其ま、海苔とて、  
間、二條つ、北日、照す  
夜、と、物と、ち、り、と、化  
より、魚、れ、し、り、り、

海苔の名や、  
あり、猫、北、う、け、出、を、新、十、の、月  
香、り、も、香、し、白、髪、は、冬、北、月  
獨、法、師、と、す、北、と、息、し、

煤、掃、十、山、凡、う、け、て、吹、通、  
寒、を、魂、望、北、日、り、明、て、風、葉  
神、の、に、總、然、  
十、五、の、考、七、の、こ、も、年、北、香  
行、燐、を、消、せ、て、氣、乃、吹、し、忘  
追、き、も、山、へ、帰、る、り、氣、の、り、

安永三年六月

翠梅堂

蕉門從諸書林

井筒屋花多漸

橋屋吹多漸

坂行

